

時評

## 学問の発信 人びとに訴える方法探れ

学問と芸術は同じ頭脳労働の中でも対極の位置にあるように見えるが、どうやらやっていることはそれほど違わないようだ。あるものを見、時には詳しく観察し、それを自分なりの方法で表現する。ただし学問は前半部分に力を注ぐが、芸術は後半部分にエネルギーを費やす。少々乱暴な言い方を許していただければ、こういう対比も可能だろう。

ところが、その表現の方法とめぐって、両者はずいぶん違うことには最近はたと気がついた。芸術は、いつのころからか一少なくともその多くのジャンルで一人々に直接その成果を発信する術を身につけた。

芸術では、成果は作品という形で表現されるが、その作品は世の中の普通の人びとに直接評価される。おもしろくないものは社会から見向きもされずに葬り去られていく。一方面白いものは人の心をひきつけ多くの人の関心を集める。ある意味でこれほど公平な評価もあるまい。

また最近では、もっぱら鑑賞者であった人びとが発信の側に回るケースも増えてきた。芸術は鑑賞者たる一般の人びとを当事者として取り込むことに成功しているようにもみえる。

一方、学問、ことに基礎学問の社会には、今なお、一般に対する発信を軽んじる風潮がある。象牙の塔はいまだに健在である。学問の世界の評価はあくまで学問の世界という閉じた世界での自己評価なのだ。そのことも関係してか、学問の世界は人びとに直接訴えかける方法をいまだ見出せずにいるように思える。

演奏会では数百、数千の人びとが割れるような拍手を送ることがあっても、学術講演会ではそうしたシーンは、ごく一部を除いてまず見られない。それは感性に訴えるか理性に訴えるかの違いであるだけでなく、訴えかける方法の巧みさにも関係しているように思う。

21 世紀に入り、世界は混沌の度合いを深めつつある。地球環境問題はますます深刻化している。日本をみても、高度医療は崩壊寸前、大災害が襲来したわけではないのに人口が減少するという未曾有の事態を迎えている。

誰にも未来の予測がつかない今、学問の世界には、どう生きればよいか、どんな社会をデザインすればよいかを、自信をもって指し示すことが求められているように思う。それも、一般の人びとを当事者として議論にまきこみながら。